

西山家の名體不二說に就きて

上 杉 慧 岳

佛體と佛名との交際は、淨土教義上重要な論目の一なることは言ふを待たざる所、而して今予は此の佛體佛名の關係が如何に淨土宗西山一家の人に依りて考へられしかの一端を論究し、以て我が眞宗學研鑽の資糧として提供し度く思ふ。

元來、西山一家にありては、その教義の特色として、佛體即行、名體不二、願行具足、機法一體等の論議は甚だ重要なものにして、此等の諸論は相依りて、その衆生と佛との關係論、即ち生佛一體説を成すものなることは、淨土教義研究者の等しく認むる所なり。而して此の生佛一體説、即ち此の佛體即行等の諸論は、實に西山教義の中核をなすものにして、又その淨土教義の特色を發揮する所の本質的義綱なることも疑を容れざる所なり。されば今その名體説の如何を論究するに際しては、もとより此等の諸論の概略、並に此等の諸論との關係の如何をも詳密に論定することを必要とするものなるが、予はすでに、雜誌「西山教義研究」第六號、第七號上に、鑑知國師の生佛一體説と題し、略その概略を論究し終れるを以て、今は此等の論究を省略し、直接その名體不二説に

就き、其が如何に立説され居るやの考察をなさむとす。

西山國師の著を繙くに、國師は或は願行とか、或は機法とか、或は生佛とか種々の對語を、種々なる意味に用ふると同様に、名體不二の義を其の書中至る所に開説し、且つ又此を種々なる形式を以て説示し居れり。先づ玄旨二十（玄義分自筆鈔の略、以下此に同じ、頁數は全書本に依る）初を見るに、經名を釋して、

其名者正經體也。名體不二爲此經本意。

と云ひ、名體不二を以て觀經一部の所顯の本意と決し、或は祕訣集七一四頁には、

一切萬法有二名體一二具足。名慈悲體者智慧也。名智慧者體慈悲也。

と云ひ、同第十一二五四頁上には、

一切物者一體具足名體二也。

と云へる如きは、其の一例なり。然し西山家にありては、元來名體の關係を單に不離一體と見るよりも、強く不二一體の義を以て示さむとすることが、その信仰及び教義の組織上より見れば、むしろ自然の事と認め得るが、若し此を極論するときには、不二一體の義を説く處に、初めて西山教義の徹底味を知り得べきものにして、但に不離一體の義を以て名體の關係を示すに止らば、恐く其は西

山教義の不徹底を表現するものと云ふも過言にあらざるべしと信せらるゝなり。されば今、國師の書を探ぐるに、假使、羅註（當麻曼陀羅註記を略する意、以下此に准ず）二二七頁上の如き、

名體不_レ放（放の字離の寫誤歟）而爲_二不相捨離_一

と云ひ、或は選擇集密要訣二二六頁上に名體不_レ離の義を示す釋なきにしもあらざれども、其多くは、

名體不二の語を以て一體義を示すことが例となれるを注意すべきなり。かの祕訣集二四七頁上に、來迎と念佛との一體なる義を示さむとする特殊法門の釋に、來迎を體、念佛を名に配して一體なりと示したる後に、名體無二也と結びたる如きも、全く無二は所謂不二にして、不二一體の義を示したるものと謂ふべきなり。

次に西山國師にありては、かくの如く、一切の眞法に名體の二ありて具足し、而もその名體は不二なりと説くものならば、その名體の意義、及びその不二一體の意義を如何に論示し居れるやを究め、その意義を決定せざるべからず。先、國師の祕訣第二十四三四頁下を見るに、

一切萬物有_二名體_一。從_二其名通_レ體也。有_レ體而無_レ名其體無_レ益也。故從_レ名就_レ體有_二利益_一也。

有_二其體_一者必有_二德失_一。就_二其德_一者有_二欣慕之意_一。就_二其失_一者必有_二厭離心_一。故以_二此厭欣_一解_二厭離穢土欣求淨土之識_一也。悟_レ之者必歸_二來迎_一也。歸_二來迎_一者必得_二往生_一也。是則從_レ名知_レ體故。

と云へり。此の釋は名に従つて體に歸し、名に依りて體を顯すが故に、一切萬有は此の名體の二を具せざるものなし、而して其の眞實の體相は必らず德失（私に曰く見否の二と見るも可ならむか）の二なれば、此を吾人が意識の上に認むるときは、必らず厭欣の二意（善惡の二意とするも可ならむか）を生ずるものなれば、今此の厭欣の二意に依りて厭穢欣淨の識を解し得べきこととなる。従つて其の名に従ひ其名に依りて、其體に歸し、以て其體を顯せば、必らず厭穢欣淨の實體たる來迎の佛體を其の體の上に認識し得べき筈にして、其來迎の佛體を認識すれば、同時に佛體即衆生往生の行體たる原理よりして、衆生必得往生の謂れも此に悟り得べきなり。要するに一切の萬有は、來迎の佛體、即ち宇宙の眞實體に歸して往生極樂すべきことを示すものと見る考なり。此れ國師がかの有名なる衆譬法門（此法門に就きては、無盡燈誌第二十三卷第七號所載「證空上人の衆譬法門に就いて」の拙稿參照を乞ふ）を立説する思想と同一なる流れを表示したる釋にして、此は即ち宇宙の現象を往生極樂と云ふ一事を以て説明せむとするものにして、而も此を名體の關係論の上に説き及したるものが今の釋なることを思ふなり。即ち此の名體の意義をそのまゝ更に彌陀の名號と佛體との關係に合致せしめ、一切の萬法は厭欣の意を表示するが故に其眞實體を覺悟せば、來迎の佛體に歸すべきものなると共に、凡夫は稱名、換言すれば念佛と云ふ佛名に依りて其の佛名の眞實體を覺悟せば、此に佛體の何たるかを覺るべし。此れ佛名に依りて直ちに佛體の實義に歸入する所以に

して即ち體に即する名、名に離れざる體の意義たるなり。而して佛體の眞實體相を覺れば、此に機法一體、生佛一體の根本原理よりして、彌陀の佛體は直ちに衆生往生の行體たる所以をも識得すべきなり。（是れ國師の佛體即行論の中核）加之、此の識得は凡夫往生の行體の識得なれば、此の識得によりて凡夫の往生は決定し、やがて佛體の眞實體に一致歸入すとなすものなり。國師がかの定他_{下二七六頁下}に（定善義他筆鈔の略）名體不二を問答して、

答曰。顯_レ云_下稱名即往生也。往生即佛體也_上也。

と簡單に示したる釋は、實に此義示を明示せるものと云はざるべからず。尙鈔文には、此處に、一字下げて、私云として、山王明神、三井の行圓に告ぐる因縁、即ち山王の名字が三諦即一の義を表現するものなりと云ふ事を以て、名體不二の義旨を述べ、次に一心三觀一念三千の義またかくの如しと示し。更に轉じて、六字名號に就きて名體不二の義を論述せし一文を出せり。此の釋もと天台一家の釋義なることは萬人等しく認め得べく、國師の思想が非常に天台の實相論的思想の色彩を帶び、此の思想よりして、常に西方淨土の彌陀敎を説明せむとするものなることの證とするに足る釋なれども、此の私云等の文は異本になく、恐く後人の私釋追加と考へられ居るものなれば、今は此を省略することゝせん。されば退いて次に同定他_{上二三二頁下}の釋を見るに、觀經下中品の化爲清涼風の文を釋するに、

其清涼風者今佛體、口稱南無阿彌陀佛也。唱氣ハ即名體不二也。

と云ひ、又禮自（禮讚自筆鈔の略）二四二四頁下には、

專稱彼佛名ハ名體不二ノ故ニ爲念佛正定業ニ也

と云へり。此は國師の名體不二説の歸趣すべき最後の結論としも謂つべき釋義にして、上の如く佛名に依りて直ちに佛體の眞實體相を識知するを得とすれば、論理の歸結として、佛體即佛名、佛名即佛名にして、唱ふる氣は即ち佛體そのものゝ表現ならざるべからず、此れ西山一家の名體説が、唯に不離説に止らずして、不二説を強く主張する所以にして、同時に予が屢々西山國師の教義には假令風息念佛の義が表面判然と説かれざれども、その教義の歸結、思想の推轉より窺へば、此の風息念佛の奥義がやがて肯定さるべき傾にあるもの、否、その風息念佛義の胚種は、國師の思想及び教義中に潜在するものと論定する所以なり。

尙此の名體不二説と、上に述し所の西山特有の衆譬の釋義との關係を、最も鮮明に示したる釋義を抜出せば、羅註第九一五七頁下、

法界ノ體性ハ空而歸ノ名也。歸ハ名ニ者衆譬ノ法界ナル者皆歸ニ南無阿彌陀佛ノ名ニ也。依レ之法界皆念佛

也。諸佛如來是法界身ノ故也。乃至今（觀經）無量壽云云南無阿彌陀佛。以此題目一説二十六觀一時。眞假依正因果善惡明ニ此中。云云又此經定散文中唯標專念名號得生。法界能譬所譬皆念

佛ナル故ニ。乃至是則法界皆顯^{シタル}爲^ニ往生ノ衆譬^ニ之意也。從^ニ念佛往生^ニ之外無^キ法界體^ニ故也。

と示し、四十八願要釋鈔上^{五頁に}

一切ノ萬法名體ノ二具。其名者窮^ニ念佛^ニ（佛名）。其體者極^ニ來迎^ニ（佛體）。乃至是皆作^ニ往生ノ衆譬^ニ也。

と云へる如きは是れなり。吾人は此等の釋義の中に潜む所の、國師思想の何たるかを深く考察せざるべからざるなり。要するに、名體不二論を一切萬象の上に立て、此を念佛と佛體との關係の上に結論する所以は、此を以て生佛機法、迷悟因果の關係を闡明し、此に國師特有の念佛義を組織し、宇宙の一切を念佛往生の一義に歸攝せしめむとする深大なる釋意なることを謂ふなり。

次に然らば、此の名體の關係を以て如何様にその生佛、機法、迷悟、因果の關係を説きしやと云ふに、此を論究するには、先づ南無阿彌陀佛の六字に就きての名體不二説より研尋するを順序と謂はるゝなり。今國師の六字釋中、機法、生佛、迷悟、名體の關係を、最も詳密に論じたるは祕訣第十二^{四五}以下の所明なるべし。即ち上にも少しく示したる如く、國師は先づ一切の物には一體に名體の二を各具足すと前提したる後、衆生と佛とを因果、迷悟の異なりと決し、次に名體を左の如く分別したり。

衆生は

無量壽の體

南無阿彌陀佛は

衆生の名

歸命無量壽覺は

衆生の體

佛を無量壽と云ふは

衆生の體を以て佛の名とす。故に無量壽佛と云ふ。

阿彌陀如來

梵語にして慈悲也 佛の體。

無量壽

漢語にして智慧也 衆生の體。

かく衆生を以て佛體とし、佛を以て衆生の體と認め、而も同時に、衆生の體を佛名とし、佛體を衆生の名と釋する所以は、此れ實に彌陀は機法一體、生佛一體の覺體、換言すれば生佛俱時成就の正覺を成じて顯れ給ふ覺體なる故に、佛は衆生を體して自ら覺體を成じ、同時に衆生は佛の正覺成就に依りて往生の分を具し、其の體を成ずるものとなすなり。此れ即ち予が屢々西山家の生佛一體説に就きて論究するが如く、彌陀の正覺は機法生佛一如宛然たる實相の理體が、そのまゝ事の差別界へ此の一如一體の相を具して顯現せられたる覺體なり。故に理として法身佛が生佛一如宛然たると同時に、此の一如法界の理より顯現したるこの事の報身佛としての彌陀の眞實體相を究むれば、そこに直ちに生佛機法一體の如實相を宛然として認め得べきなり。此れ即ち彌陀の覺體が生佛一體俱時成就の正覺なりと論說さるゝ所以にして、此により佛は衆生を體して覺體を成じ、衆生は佛の覺

體成就に依りて、往生の分あることを相知し得て、其の體を成ずることを得るなり。今の釋に、南無阿彌彌佛の六字を中心にして、梵語漢語の替りを以て種々に分別し、機法、生佛の名體を交互に論述したる特異の釋義は、全く此の思想より演繹されしものと信せらるゝなり。同じく次下に、名體の關係を今生と後生とに約して、更に分別したる處に、

今生(迷を意味す)に衆生の體は無量壽佛なり。定散の二法を無量壽と云ふが故に、

岳私に曰く、彌陀佛は衆生の行たる定散の二法を行じて無量壽の覺體を成じ給へるものなり。故に機法一體他力の領解より此の無量壽佛を見れば、定散の衆生の體は佛の體と一體の實在にして、無量壽佛の上に顯現せることを知る。而して佛(悟)が機法一體の如實相の顯現的實在とせば、今日の衆生(迷)は同時に此の機法一體の如實相の潛在的實在なり。従つて今生(在迷の時)に於いては、(換言すれば因位より見れば)未だ佛體の實相は、衆生の上に如實に顯現せざれども、此の現實の衆生體そのものゝ上に一體なる佛體の意義を認め得べきなり。此れ、佛體に不二なる佛名を無量壽佛と云ふ名言の上に見て、直ちに衆生體は今生に在りては無量壽佛と云ふ佛名なりと示す釋義に非るなしか。即ち國師は常に六字に就き、梵語漢語の替りを、法と機佛と衆生、果上と因位とに配釋して、機法一體の妙義を論述するを例とするが。今も歸命無量壽佛の六字と南無阿彌陀佛の六字とを對釋し、又は無量壽と阿彌陀との、三字三字の對釋をなす所、全く此の意味を表せることを注意すべきなり。

今生(迷)に衆生(迷)の名は南無阿彌陀佛なり。南無を加ふれば、名を成ずるが故なり。南無阿彌陀佛

は佛名たるを而も衆生の名也と云ふなり。

吾私に曰く、此れ即ち上の思想よりして推究すれば容易に解し得べき歟。即ち無量壽の阿彌陀佛（法）に歸命の南無（機）を加へて、南無阿彌陀佛と云はるゝ處に、始めて佛名の上に機法生佛一體の義を表示せるを認むべく、同時に六字の佛名そのものが機法一體なることも此の佛名は直に衆生名なることを認め得べし、即ち悟れる彌陀佛は、六字を自己の佛名として示すと共に、衆生の名として此を今生に詮せるものとなるなり。後生（悟）は佛を無量壽佛と言ふなり。衆生を以て佛の名とす。

阿彌陀如來は臨終に來り給ふが故に、極樂の別願所成の佛體なり

岳試に解して曰く、此れ亦上の釋義と連關してその意を推し得べき歟。即ち後生に至りては、衆生が正しく他力機法一體の安心に基き行を修成する結果、機法一體の佛體に歸入し、その用を顯現するものなり、換言すれば、因位の衆生位にありては、機法生佛一體の體はその如實相を顯現せずして、潜在的實在として存在せしものなれども、一度、此が悟の泉上に上りては、その衆生としての潜在的位より轉じて顯現的實在として佛となり現るゝものなり。此れ即ち機法生佛の一體説よりすれば別願所成の彌陀の佛體にして、又臨終に來り顯れ給ふ來迎の尊體なるべきなり。かの正覺成就の彌陀佛が、生佛俱時成就の佛と稱せらるゝ所以も全く此の意義ならざるべからず。従つて此の顯現されたる佛體は機法一體の道理よりして衆生の體を離れて存すべきものにもあらず、機法生佛一體の佛體として現ぜしと共に、其は衆生の體たる義を表示すべきなり。此れ即ち佛體に不二なる佛名に於いて衆生の體を認めて無量壽佛と釋する所以にあらざるなき歟。

と示し、今生後生の兩世に亙りて生佛の體名を交互に認め得べきことを示したる後、此を結びて、
故^ニ一體^ニ具^ニ足^{スル}名體^ノ二^者ナレバ。今生ハ衆生一體也。佛^ヲ爲^レ名^ト。後生ハ佛一體也。衆生^ヲ爲^レ名^ト。
就^ニ淨土^ノ彌陀^ニ。以^ニ有^ル此^ノ迷悟一體^ノ之義[。]卽^チ聖道^ニ談^{スル}卽身成佛。因果。邪正一如等^ナ也。而^ルニ
不^レ覺^カ此義[。]故^ニ其談皆虛說也、等

と云へるは、最も能く以上の釋意を表示せる語にして、蓋し名體不二説の依りて立せらるべき核心
を語るものと謂はざるべからず。もとより聖道家には生佛一如の妙義を談すと雖も、淨土一家の如
く、淨土の彌陀に就きて此の迷悟一體の奧義を覺らざるが故に、その談義は徒然なりと説破する處
に、吾人は國師の釋意を捉ふべきなり。

然らば淨土一家に於いて、衆生と佛と一體と談することは何の要ぞと云ふに對し、同祕訣第十一
の次下の釋には問答を設け、その答釋に、

淨土家以^レ之爲^ニ宗[。]至[。]極[。]外人所^レ不[。]覺[。]也。乃至佛與[。]衆生[。]造[。]一[。]機[。]一[。]體[。]一[。]機[。]一[。]體[。]故[。]我^レ稱^レバ
聞^ニ我耳[。]禮^ニスレバ我身^ニ見^ニ我目[。]我意^ニ念^{スレバ}之知^ニ我意[。]彼此三業不相捨離^トハ者。造^ニ一[。]機[。]我意
所^レ思。我身^ニ翔^レ之也。今隨^ニ意業^ニ而身業^{ナル}故[。]所^レ作^ス是^ヲ所^ニ意業^ニ思[。]也。故^ニ意業^ヲ爲^レ名^ト作^ニ
衆生[。]身業^ヲ爲^レ體^ト造[。]佛。衆生願^ニ往^ニ生^ニ意業[。]南無阿彌陀佛ハ身業^{ナリ}。來迎ハ必應^{キガ}來^ニ故[。]身業

意業不_レ造_ニ一機_ニ耶。衆生願_ニ往_ニ生_ニ念佛_{スル}佛不_ニ來迎_ニ事、不_レ可_レ有_レ之。故_ニ名_ヲ爲_レ願_ト。體_ヲ爲_レ行_ト。故_ニ名_ヲ體_ヲ造_ニリ_一機_ニ而決_ニ定_ニ往_ニ生_ニ也。是_ヲ云_ニ證得_ニ往_ニ生_ニ也。乃至心與_レ識。衆生與_レ佛。願與_レ行。而_モ二而不二也。故_ニ衆生唯一_ニ稱_ニ念_ニス_レ南無阿彌陀佛者、佛_ノ來迎、必_ズ應_レ來_ニ故_ニ。往生決定_{セン}。

と云へるは、生佛機法の一體不二説を以て往生淨土の教義の基礎と認むることが西山一家の至極なることを明言せし文字にして、此にその機法一體説と相關連して、その名體不二説の出づる所以をも釋義の奥底に容易に洞察し得べく、又その名體説が全く不離説に止るべきものにあらで、不二説を以てその根基とすべき理由も察知し得るものと謂つべきなり。今釋中、一體説を論じて彼此三業不相捨離の論に及び、三業一體の義を説きて、かの三業念佛論を思察せしめ、而も此の一體義に於いて往生の安心を決定するを以て證得往生と決したる點、西山一家の教義の根本義綱を明示せるものとして、我等淨土教義研究者にとりては深く注意すべき點なり。即ち西山の願行具足論。佛體即行論。名體不二論。機法一體論。心意識一體論。三業一體論。三業念佛論。證得往生論。等は相連關して、その淨土教義の始終をなす論脈なることを想はしめらるゝことなり。今の釋を圖示せば

彼此三業 意業 名 衆 生 願 往 生 心 願 名 心
不相捨離 身業 體 南無阿彌陀佛 念 佛 行 體 識
二而不二 一體 ↓ 決定往生(證得往生)

此の三業の中、口業の配釋なきは恐く別に他の意味あるにあらず、國師の事相部の鈔に於ける釋義の通例として、常に生佛とか機法とか願行とか名體とかの二對目を三對目に配する場合には、隨宜その一に配することを省けり。他意なし、要は二而不二なる一體義を表示するものなりと謂ふべきなり。即ち機法名體は不二一體なるが故に、今生は衆生一體にして佛を名とするを以て、此の機法一體の關係を、三心の領解發して、佛名の上に證得體驗して、衆生念佛すれば往生を得べく、後生は佛一體にして衆生を名とするを以て、此の三心領解の決定より進むで南無阿彌陀佛を稱念し往生すれば(當得往生)來世には來迎の行體に歸入し淨土に往生して成佛すべきなり。祕決二頁上三頁上に、名體を娑婆と淨土との彼此二土に約して釋する釋も亦此に同じ。

更に祕訣第二三八以下の釋名門の釋に就きて見るに、國師は一層此の生佛、迷悟の關係を六字の上に於いて論じ、而も名體の名目を以て此を明瞭に説明し居れり。即ち玄義分三の六字翻對の釋を左の如く三段に分ち、此を事相部鈔特有の釋義たるかの定散、念佛、來迎の三重、智慧、慈悲智慧、慈悲の三重法相に配當し、(此等の三重法相は國師特有の釋義なれば、此につきては特に國師の釋意の如何を論定せし上に文に望むべきが至當なれども、今は國師の名體說を中心に論定せむとするものなれば、聊か餘論に走るを思ひ、此等特殊の法相の意義の論述は、今此に省畧す敢えて讀者の諒恕を乞ふ。)

言無量壽者乃是以下——念佛重——慈悲智慧重
 又南者晃歸以下——定散重——智慧重
 今言無量壽者以下——來迎重——慈悲重

而も一經の題に、無量壽と出せるは、一經に唯智慧、唯慈悲、慈悲智慧の三重ある事を要する一經の一部の標示なれば、善導は釋名門に於いて此の題號に就き、三重の意を細釋せるものと論せり、而して其の中、第一念佛の重の釋に於いては、先づ南無阿彌陀佛と無量壽との梵語漢語を、慈悲と智慧との兩重に配し、而して此に對して念佛は慈悲智慧を具するものなりと云ひ、次に、

題ノ無量壽ニハ都不可離此ノ念佛也。依リテ之ニ先釋ニ南無阿彌陀佛一也。經ニ題ニル無量壽ト者佛ノ體也。南無阿彌陀佛者佛ノ名也。而具ニ足ニ南無佛ニ故成レ名也。是爲ニ顯ニ念佛一釋ニル南無阿彌陀佛ト也。是レ慈悲智慧ノ念佛ノ重也。

と示し、次に定散の重の下に於いては、

結ニ故言無量壽覺ト者慈悲ナリ。爲レ此結釋ト者可レ云歸者是南等一也。結釋上下スル者智慧定散ノ重ナル故ニ。取ニ上ノ南無阿彌陀佛之名。即欲レ爲ニ衆生ノ體トト結ニ漢語ニ也。無量壽トハ者佛體也。是明シテ南無阿彌陀佛ト。而之後結セハ無量壽ト者成ルカ佛ノ體ト故ニ。具ニ歸命覺ト結スル之時、無量壽ハ者成ニ衆生ノ體ト也。其故ハ歸命ハ者機也。云レ奉レ壽故就レ機也。無量壽者即定散ノ法也。即チ明ニ一切

衆生ノ機ニ有_二二種ニ是機也。覺者人也故機也。經ノ題ニ云ニ唯無量壽者是佛ノ體也。然ルニ具_二スルノ歸命覺_一之時。此無量壽成衆生之體也。故梵語之時ハ爲_二慈悲_一爲_レ佛。漢語之時ハ智慧_ニニシテ而_レ爲_二衆生之體_一也。依_レテ之經ノ題ノ無量壽結_{スル}歸命無量壽覺_一故即_レ成_二衆生之體_一也。是故佛與_二衆生_一以_二梵漢之替_一。佛名與_二衆生體_一依_レテ慈悲_一爲_二表裏_一也。是則佛ノ名ニ具_二足_一于衆生ノ體_一故。稱_レ者皆生_{スル}也。諸佛ノ名號ニ無_二此義_一等。

と云へり。此の釋に依れば、無量壽の漢語は、衆生の體を裏す。梵語の南無阿彌陀佛は佛の名を示す、されど經題に、唯無量壽と云ふときは佛體を意味す。其の所以は、佛名の南無阿彌陀佛は此を漢語に翻對すれば歸命無量壽覺なり。即ち歸命覺を具する無量壽の體は佛體なれど、機を離れざる機法一體に成就されたる覺體なることを標示するものなれば、漢語の義趣を以てすれば歸命覺の意を一體に具する無量壽は、佛體なると共に一面直ちに衆生の體たることを得。此れ今の釋に無量壽を佛體とし、而も衆生の體と成ると釋成する所以なり。故に今經題の無量壽を一度、南無阿彌陀佛の六字と翻對して、而る後に無量壽に結釋する所に、六字の佛名には衆生の體を具することを明らめ得て、衆生は南無阿彌陀佛の佛名を稱へて往生を成ずることを得る所以が始めて立説さるべきなり。此れ善導が釋名門に於いて、殊更に六字翻對の釋を施し、經題の無量壽は單なる佛體佛名にあらずして、機法一體の覺體を表するものなれば、自ら定散、念佛、來迎の三位、智慧、慈悲智慧、

慈悲の三重の經意を標示し、生佛機法一體の實義を如實に表現する經題なりと、非常なる苦辛の釋をなす所以なり。故に若し善導の疏を讀むもの、一度機法一體の謂を覺知せずして、衆生の體に離れざる佛體を示す無量壽の佛名なる所以を識知せざれば、善導の釋意を全く得難きものと謂ざるべからずとは恐く國師の釋意たるなり。故に今の釋に、經題ニハ無量壽者佛體也等と慈悲智慧の念佛位を釋したるは、三重法相の中、念佛位の南無阿彌陀佛は、機法一體の覺體に不二なる佛名たることを開示したるものなれば、衆生が一度他力機法一體の領解を發得して、此の眞實義を六字名號の上に覺知すれば、それは同時に自己の眞實體相の覺知にして、生佛俱成の覺體に自己も分あることを識知覺證すべき所以にして、此れ即ち一發三心の當相とも、證得往生の安心決定とも、稱せらるゝ所にして、此に吾人凡夫が他力念佛の行者たるの自覺を得ると共に稱念皆生の大義を認め得べしとする所以なり。上述の祕決第十一二五の證得往生の義旨、或は又かの當曼八講論義鈔十一に、

釋名ハ依正體ヲ南無阿彌陀佛ノ名ニ極メテ。衆生證得心內ニ。極樂ノ依正體ニ。衆生ノ悟リ外ニ極樂ノ依正體ナシト釋シテ。一切念佛ノ名ニ極メテ釋ス云々

と云へる釋の義趣の如きも亦、全く此の思想より派生されしものに外ならざることを想はしめらる。

依りて更に進むで今の祕決集の次下、第三來迎慈悲の重に約する釋下を見るに、一層國師は此の

意を進めて、若し衆生が一度三心發得して機法一體の覺體に、自己も分あることを自覺證得すれば、
轉て當得往生の夕には淨土より來迎の佛體顯れて、此の佛體に一致歸入することを述べて、上來三
重の釋意を結論して、更に其釋意を明瞭ならしめ居れり。依りて今其の要文を引けば左の如し。

是又上ニ取リテ爲ニ衆生ノ體ト歸命無量壽覺ノ方ト從ニ衆生ニ造ニ來迎ノ體ト也。

初ノ取リ下ニ題ニ無量壽ノ佛體ト釋スル與名ハ者。不レシテ離體爲レ名故。化佛尋レ聲來ル。(念佛位。佛體より
佛名へ)

次ニ釋ニシテ南無阿彌陀佛ニ結ニスルハ歸命無量壽覺ト者。一切ノ物ニ具足スル名體。佛名不レ離ニ衆生體ト。(佛
名より衆生體へ)

有ニ親緣ノ義。衆生ノ體ハ具足スル佛名ニ故。彼此三業不相捨離也。(定散位、衆生體より佛名へ)

今又、從ニ西方極樂淨土ニ而モ來迎佛ハ。顯レ從ニ無量壽ノ法ニ而モ來ニ迎ニ衆生。無量壽ノ之法者定
散ニ法一切衆生也。顯レ佛ハ從ニ此法ニ故。遍觀一切色身施テ攝取不捨之利益ト也。(來迎位、佛名

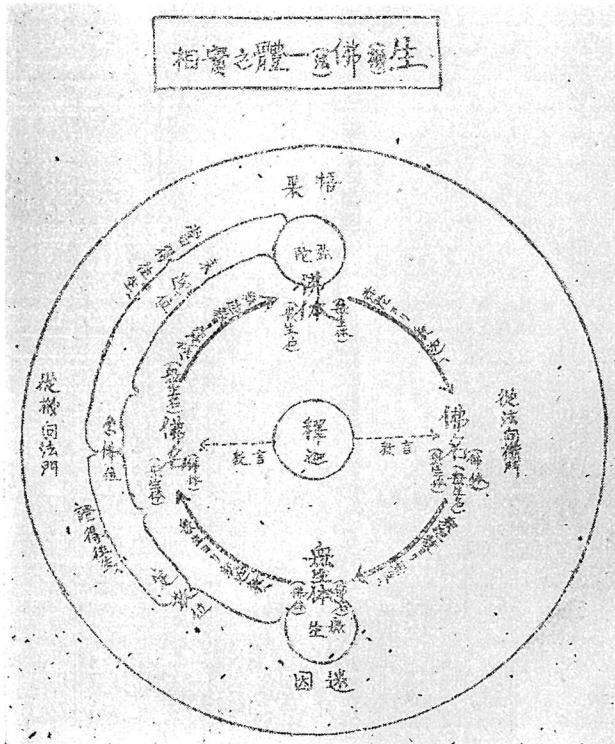
(衆生體)より佛體へ)

是以於ニ平ニ生ニ者。佛ノ名備ニ衆生ノ體ト。行住坐臥稱ニ念之。(念佛位の證得)。

臨終ニハ佛者體ニシテ而垂ニ來迎ト。衆生ハ名ニシテ而失ニ其ノ體ト也。乃至。即便往生者衆生爲レ體ト具足ス
佛名ト。

當得往生者佛^ヲ爲^シ體^ト、衆生爲^レ名也。

と云へり。今此の釋意を圖示して、定散、念佛、來迎の三重法相に此を配釋し、又平生臨終の二往生に分ちて作れば大畧左の如きものを得べしと考へらるゝなり。



故に今、更に上來の所論を冷靜に考察して、國師の生佛名體の關係論を極論するときには、機法一體の正覺を成就せし、彌陀の覺體、即ち佛體は、その一面に衆生體を意味し、同時に佛體佛名不二なると共に佛體と衆生名とは此れ亦不二のものなるべきなり。而して此を今日の衆生につきて見れば此れ亦衆生の體は、其一面に佛體と一體なることを意味し、同時に衆生體と衆生の名とは名體不二なると同時に、衆生の體と佛名とは此れ亦不二の關係にあるべきなり。彌陀が正覺を成じて其の覺體を、釋迦の言説上に、六字名號、即ち佛名として表現し、更に釋迦が此の佛名を衆生に對して、十六觀乃至は一代の佛敎として開説せし敎義は、此を一面より此の機法名體の關係を以て論述すれば、全く彌陀がその覺體を釋迦の言敎上に、體と不二なる名、（即ち名言）を以て詮顯せしものとも云ふを得べきなり。故に其の彌陀より釋迦への佛名としての表現は、佛の名體不二を示したるものにして、又釋迦より衆生への佛名の開説は、此れ又、佛體と不二なる佛名を通じて、機法一體の覺體、生佛俱時成就の謂をさとしむるものに外ならざるなり。換言すれば、釋迦の敎説なるものは衆生其れ自身が本來佛體と一體の實在にして、同時に佛名と不二なれば、この佛名が、即ち衆生自己の名なる所以を覺悟せしむるものに外ならざるなり。故に今更に、此の從法向機の敎説流出を基として、此に依りて衆生が眞實に自己の眞相を自覺し行く、從機向法の道程を深く考ふれば、迷へる衆生は、其初に當りては自己が、生佛一體の覺體に分あることを知らずして、佛と衆生とは本來相

距つものと思へども、一度佛陀開設の一代敎より漸次彌陀の本願名號に尋ね入り、佛の六字名號が機法一體の佛體に不二なる佛名なる所以を信知するに至れば、其の佛名は實に衆生の體に不二なる佛名にして、同時に衆生自身の名なることが知らるゝなり。此れ他力機法一體の觀智が開れし端的にして、三心の發得、即ち證得往生の決定せしものたるなり。而して此の機法一體、名體不二の實相を知れば、必ずや佛名に不二なる佛體に歸入すべきなり。三心發得の行者が、臨終に正しく來迎の佛體に一致歸入するは、全く此の道理に外ならず、而して此の佛體に正しく歸入すれば、此に機法生佛は一體の實在として顯現し、佛體を離れて衆生體あるべき筈なく、佛體は衆生の體にして、又衆生の名なることが體現さるべきなり。此れ正しく當得往生の證悟が實現されし相なるべきなり。而して、此の從機向法の次第に於いて、最初、機が自己の實相を知らずして、法に對向する位は、即ち行門自力の定散位なり。然るに釋迦敎の誘引に依り遂に念佛一法に歸入し、佛體に不二なる佛名の上に、機法一體の觀智を發得すれば、此の位を所謂、觀門他力の念佛位と云ふなり。而して此の念佛位に於いて、機法一體の理をさざれば、必ずや、佛體に一致歸入す、故に佛名より佛體への趣入は、此を三重位に配すれば來迎位なりと、此に所謂、定散、念佛、來迎の三重位を建てしものが證室の一特殊法門たるなり。

歸する所、彌陀より釋迦へ、釋迦より衆生へ、衆生より釋迦の敎說へ、釋迦の敎說より彌陀の覺

體へと、順次に巡還する状態が、機法生佛一體の覺體が、迷悟因果の全般を通じて進展する實相なりと見るが、證空の名體不二説の綱格なるべしと信せらるゝなり。實に國師は機法一體の思想を以て、名體不二を説明し、更に此を以て常に迷悟因果の關係を説き、釋迦一代教の開説されし本意並に一切衆生の修行成佛の歸趣を論定せしものなり。されば此の機法一體、名體不二の思想こそは實に西山の教義、即ち國師の往生淨土の行信義が依りて立つべき根本の立脚地點なることを此に明に認め得るなり。何となれば、機法一體、名體不二の實相を如實に體認する所に彌陀の正覺成就の佛意も知られ、衆生念佛往生の實義もまことに謂れあることゝなり、そこに所謂聖道教的行門自力ならざる、淨土往生觀門他力の教義が成立さるゝに至るなり。即ち證得往生の一念に、衆生は機法一體の行者なることが自覺さるゝ所に、始めて此の父母所生の身たり乍ら、他力往生の不行を修する尊き身と轉成するものなり。國師が常に、即便、當得の二往生の義を以て淨土の行信義を立つる意も全く此に在るなり。即ち要釋抄下二四頁下に、

衆生我カ體テ口ニ稱スル者、我體ヲ稱スル南無阿彌陀佛ト也。是ヲ聞ナ我耳ニ者爲ニ佛名ト也。聞者名也。即チ我聞レ之者爲ニ佛聞ト故。就佛云佛名一。是ヲ今以ニ我一身一。造下佛ト與ニ衆生一不相捨離ト。衆生念佛スレハ者。不レ漏ニ一人一皆往生スル也。爲レ呈上此義ヲ。佛與ニ衆生一爲ニ一體一也。云々

と云へるは、此の義相を名體不二説よりして強く論じたる好例なり。

以上、國師の名體不二説の一般を論究しぬ。尙この論議は國師の述作中、到る處に出で、一々枚舉に遑あらざるなり。即ち名體説と本願論との關係、或は念聲是一論と名體説との關係等、此等の研究はもとより、更に進むでは、此の國師の名體不二の説が、其後西山一家に於いて如何に論述さるゝに至りしか。即ち西谷、深草二流派の上に如何に説き傳へられ、又如何に此の釋義が變化し行きしかの研究、及び今家眞宗の教義との交渉を論究し行けば、極めて興味深きことならむも、今は此れにて暫く筆を止め、他日更に稿を新にせむとす。唯最後に一言せむとすることは他なし。今吾人が以上處々に出づる所の釋義を透して、靜に國師の思想を惟忖するとき、遠く西方の彼方に成就せられたる彌陀の佛體も、はた又近く此方に聞き得る六字の佛名も、すべて機法一體如實の覺體の顯現として此を見る以上、其は同時に、衆生の體名の客觀的顯現として、歸する所、其は直ちに在迷の吾人凡夫に、自己の如實の體性を自覺せよとながす覺者の溫き叫びに外ならずと見るべきこと。換言すれば、彌陀が正覺を成じ、又名號を成就する所以のものは、彌陀は衆生に如實の體性を知らしめ、その證得を促し、自覺を勸むる所の佛陀にして、即ち教主として覺者の位置にある存在と認めしものにあらざるなきか。此れ我が祖親鸞が、彌陀佛を單なる教主として見るにあらずして、此を無力無善の衆生の爲めの教主としての覺者と尊崇し給ひ、この報佛の本願酬報の依正二

報の全果徳に依りて、衆生の轉迷開悟は成就すと信知し給ふ結果、此に如來の本願力廻向を以て救濟の主體とする宗教を信知し給ひしとは、兩者その思想の根底には、遠き距離のあるものにあらずやを想はしめらるゝなり。而して此の思想上の相違が聽て、その兩家の教義上、名體說の上に於いて、一は飽く迄此に不二說を主張せざるべからざるに對し、一は名體の不二說をさるべきにあらずして、佛體佛名の關係は、不離說を以て一貫すべきことが、その正しき解釋と見られ、又蓮師が常に西山家の書にして、名體不二說の出づる安心決定鈔を常々愛讀し給ひ乍ら、かつて一度も名體不二の論をなし給はざる所以も、自ら此に推し得べき所ならむか。以上敢えて管見のまゝを記す。

(大正一五・六二〇)